

日韓バイリンガル児の言語発達の一様相

— コロナ禍における移動による母語の喪失に着目して —

秋 葉 多佳子

1. はじめに

2020年に始まった未曾有の災禍、Covid-19の大流行により、失われたものは非常に多岐にわたる。また、感染症という性質により、外出の自粛、海外渡航の制限等、人々の移動の自由が制限されてきた。この移動の制限は人々に生活様式の変化による強いストレスを与えただけでなく、一個人のアイデンティティを揺るがしかねない母語の喪失という言語発達上の問題も生み出している。

本稿は、多様なコロナ禍の人々への影響の中でも言語に関する一側面について、そして、より複雑な言語発達を経るバイリンガル児の母語の喪失の一例について記録することを目的とした。本稿では、日韓バイリンガル児のコロナ禍における母語の喪失について、言語発達の各段階における、保護者および養育者の移動および言語使用の観点から記述する。なお、本稿の考察は、一児童の短期間の言語発達の様相について、児を取り巻く保護者・養育者との関係および言語使用に関する一保護者の内省をもとにしている。

2. バイリンガルの定義とバイリンガル児の言語発達段階

本節では本稿におけるバイリンガルの定義とバイリンガルの言語発達段階について、中島（2016）にまとめられている内容を中心にごく簡単に記述する。中島（2016）では、バイリンガルとモノリンガルとの比較を通して、バイリンガルは深層面で2つの言葉をあわせた1つの言語体系を持つ人と述べている。Cummins（1979）で提唱された、深層面と表層面に分けてバイリンガルの二つの言語の関係性を捉えた **Common Underlying Proficiency** とも共通する定義であるため、本稿では、中島（2016）における記述をバイリンガルの定義として用いる。

バイリンガルの分類については、2言語の到達度による分類、4技能の熟達度による分類、言語の発達過程による分類など、様々な分類があるが、本稿で

記録する日韓バイリンガル児は Covid-19 の流行が広まった 2020 年の段階では、言語発達の初期段階である 3 歳であり、上記のような分類でとらえることは難しいため、ここでは言及しない。ただし、言語の発達過程における分類に関しては、次節で日韓バイリンガル児の言語環境を記述する際、簡単に触れる。

バイリンガル児の言語発達段階について、中島（2016: 24-26）では以下の表 1 のように 5 つの時期に分けて説明している。

表 1 バイリンガル育成における言語形成期（中島 2016: 24-26）

年齢	言語発達段階	発達段階の特徴	言語形成期
0-2 歳	ゆりかご時代	親が愛情を持って赤ちゃんに話しかけることが最も大事な時期	言語形成期 前半
2-4 歳	子ども部屋時代	語彙が増え、ことばを使用して自己表現をし、ことばにより考えることを学ぶ時期	
4-6 歳	遊び友達時代	社会性の発達により保育園・幼稚園での集団生活ができる時期、また、ことばの分析力によりしりとりなどの言葉遊びも始まる時期	
6-9 歳	学校友達時代 前半	話し言葉が定着し、小学校進学により読み書きの基礎を学ぶ時期	
9-15 歳	学校友達時代 後半	自我に目覚め、学習スタイルが固まってくる時期、読解力がつき抽象的内容のものも読めるようになる時期	言語形成期 後半

本稿では日韓バイリンガル児の言語形成期前半の中でも特に「ゆりかご時代」「子ども部屋時代」「遊び友達時代」における言語発達について記述する。

3. 日韓バイリンガル児とその保護者および養育者について

本稿で言語発達の記録の対象とする日韓バイリンガル児とその保護者・養育者の言語使用およびバイリンガル児との接触状況等について以下の表2にまとめる。なお、表2にまとめた内容は日韓バイリンガル児が0歳から6歳までの期間にあたる、2016年から2022年までの間の状況である。生活場所に関しては、日韓バイリンガル児の年齢を基準に記述する。

表2 記録対象者とその使用言語および生活環境

記録対象者 保護者・養育者	使用言語	BC との接触状況	生活場所
日韓 バイリンガル児 (BC)	日本語・韓国語	-	0歳～3歳4か月： 韓国 3歳4か月～6歳： 日本
母親 (M)	日本語・韓国語	0歳から6歳まで 日常的に接触	同上
父親 (F)	韓国語	0歳から3歳5か 月まで日常的に接 触、その後6か月 程度ほぼ接触な し、3歳11か月か らまた日常的に接 触	0歳～3歳4か月： 韓国 3歳4か月～5か 月：日本 3歳5か月～3歳 11か月：韓国 3歳11か月～6歳： 日本
祖母 (GM)	日本語	0歳から3歳5か 月まではほぼ接触 なし、3歳5か月 から6か月程度日 常的に接触（途中 1か月程ほぼ接触 なし）	0歳～6歳：日本

まず、日韓バイリンガル児（以下、BCと記す）は、韓国で生まれ、3歳4

か月まで韓国で生活する。その後、保護者の仕事の関係で3歳4か月の時点で来日し、その後継続して日本に在住している。使用言語は日本語と韓国である。BCのように日常的に2つの言葉に接してバイリンガルになる場合を「同時発達バイリンガル」(中島 2016: 10)と呼ぶ。BCの母親(以下、M)はBCに0歳から6歳まで日常的に接触し、BCと同様に生活拠点を韓国から日本へと移している。使用言語は日本語と韓国語であるが、BCとの会話では主に日本語を、BCの父親との会話では韓国語を使用する。BCの父親(以下、F)は、BC・Mとともに来日した後、1か月後に韓国に渡航し、その後6か月間韓国に滞在している。BCが3歳11か月の時点で再度来日し、その後継続して日本に在住している。BCとの接触状況については、BCが3歳5か月から3歳11か月の期間は、Fは韓国に滞在していたため、映像通話での接触を除いて、会話等の接触はなく、その機会は非常に限られていた。Fの使用言語は韓国語である。3歳11か月にFが再度来日してからは日常的にBCと接触している。BCの祖母(以下、GM)はBCが0歳から6歳の期間を通して日本に在住しており、BCとの接触機会は限られたものであったが、途中、Fの不在時にBCと日常的に接触している。GMの使用言語は日本語である。

4. 日韓バイリンガル児の言語発達時期別の言語使用状況と母語の喪失

本節では、BCの言語使用について、バイリンガルの言語発達時期(表1)ごとに、具体例を挙げつつ記述した後、BCの母語の喪失について述べる。具体例については、そのほとんどが動画音声の書き起こしである。したがって、これらのデータはBCの発話のほんの一部であることはここに記しておく。

4.1 日韓バイリンガル児の言語発達時期別の言語使用状況

BCの言語使用環境と言語使用について「ゆりかご時代(0歳～2歳)」「子ども部屋時代(2歳～4歳)」「遊び友達時代(4歳～6歳)」の3つの時期に分けて詳細に記述する。まず、「ゆりかご時代(0歳～2歳)」であるが、0歳から11か月まではBC、M、Fの3名による生活が主となっており、Mは日本語、Fは韓国語でBCに話しかけていた。BCが11か月の時、保育園に入園し、午前8時半頃から午後16時頃まで保育園で生活していた。このとき、保育園では韓国語のみが使用され、保育園から帰宅後は、Mは日本語、Fは韓国語を使用してBCに話しかけ、MとFとの会話は韓国語でされていた。「ゆりかご時代」においては、BCが受けるインプットのほとんどは韓国語であり、日本語はM

との接触時に限られていた。この時期の BC の日本語・韓国語の言語使用には以下のような例が見られる。例のうち、韓国語での発話は括弧に日本語訳を記す。

【「ゆりかご時代」の言語使用例】

- ・ 까꿍, 까꿍 ,, (いないいないばあ、いないいないばあ) : 1 歳 8 か月
- ・ 아팠어, 아팠어 (痛かった、痛かった) : 2 歳 0 か月

M の内省によると、ゆりかご時代に初めて喃語以外の意味のある単語を発したのは 1 歳 6 か月～7 か月のころであり、日本語のママ、パパにあたる 엄마, 아빠 という単語であった。その他、上記例のように韓国語の単語の繰り返しが見られた。「ゆりかご時代」の発話のほとんどは韓国語であり、日本語の発話はほぼ皆無であった。2 歳 0 か月の例も BC から M に向けられた発話であるが、BC は韓国語で話している。M の内省によると、M は当時、2 歳になるまでに 50 の単語を安定して使えるようになるという書籍の記述に比べ (ライトバウン・スパダ 2014)、BC の言語使用にやや遅れが見られることを心配していた。バイリンガル児の言語発達について、同時バイリンガルについては片方もしくは両方の初期の言語発達に遅れを示す研究もあるが、2 言語の習得が言語発達を遅らせるという証拠はない (ライトバウン・スパダ 2014)。BC の場合を考えると、BC が同時発達バイリンガルであることに加え、1 歳になる前から保育園に入っており、韓国語・日本語ともにインターアクションが限られていたこと、特に日本語に関してはインプットが M によるものに限られていたことにより、言語発達に一時的な遅れが見られたとも考えられる。乳幼児の言語発達については、インターアクションの不足による言語発達の遅延 (Sachs et al. 1981) や母親の抑うつによる乳幼児の言語性コミュニケーション機能の遅延 (土屋 2021) も報告されているため、BC の言語発達の初期の遅延については今後より多角的に考察したい。

次に、「子ども部屋時代 (2 歳～4 歳)」は、3 歳 5 か月までは「ゆりかご時代」と同様に BC は保育園に通園しており、日中は韓国語のみが使用される環境にいた。また、家庭内での言語使用も「ゆりかご時代」と同様に、M は日本語、F は韓国語を使用していた。BC は 3 歳 5 か月で来日し、言語環境が大きく変わったため、来日前の「子ども部屋時代」のことを本稿では「子ども部屋時代①」と呼ぶ。「子ども部屋時代①」では、日本語の使用も少しずつ増え、日本語・

韓国語ともに二語文が見られた。また、韓国語については、より複雑な構造の文の発話も観察されている。この時期にはこれまで観察されなかった韓国語と日本語を混ぜて使用する発話も見られた。なお、発話例には文法的な間違いも見られるが、発話通りに記述している。この時期には大人との会話において複数回発話のターンを繰り返す例も見られるが、その場合、BCの発話には下線部を引いて大人の発話と区別している。

【「子ども部屋時代①」の言語使用例】

- ・あか、あお、あお！あお！（赤色のクレヨンを見せながら赤、オレンジ色のクレヨンを見せながら、青と発話）：2歳1か月
- ・出た！（人形のおむつを確認しながら）：2歳3か月
- ・피아노 치야, 나도 피아노 치다. (ピアノ弾く、私もピアノ弾く)：2歳7か月
- ・아기가 추운대, 아카ちゃんが 추워. 엄마 맨날 맨날 혼났지. 아가가 울었잖아. (赤ちゃんが寒いって、あかちゃんが寒い。ママ、毎日毎日、怒ったでしょ。赤ちゃんが泣いちゃったじゃない。)：2歳8か月
- ・はい、はい、BCたん、ん～。(電話をかける真似をしながら)：2歳8か月
- ・뭐 줄까? 손님한테 뭐 줄까 하면 어떡해. 뭐 줄까요? 뭐 줄까요? 사탕 주세요. 안 돼요. 딸기 아이스크림 주세요. 얼마예요? 오백원입니다. (何にする? お客さんに何にするなんて言ってどうするの。何にしますか。何にしますか。アメください。だめです。イチゴアイスください。いくらですか。500ウォンです。)：2歳9か月
- ・写真撮って。：2歳11か月
- ・레몬キャンディー. それ、美味しい? うん. それなあに. アンパンマン. アンパンマンのはな. アンパンマンの中で誰が一番好き? あかちゃんマンと、ドキンちゃんと、あかちゃんマン. (中略) もう噛んでるの? キャンディはなめるものだよ. 噛まないでなめて. ごっくんしないじゃん. げーするじゃん. (中略) 歯が折れるよ. 折れない. ガリガリって歯が折れている音じゃない? 折れてない.：3歳3か月

「子ども部屋時代①」では、韓国語については早い段階で二語文が見られ（2歳7か月の例）、伝聞や確認の機能を持つ文法項目を含む口語表現も観察された（2歳8か月の例）。日本語についても、単語レベルの発話から二語文の発話が見られた。さらに、2歳後半から3歳にかけては、日本語・韓国語ともに

複数回の発話ターンを繰り返す大人との会話のやり取りも見られた。

前述したように、BCは3歳5か月で日本に移動し、その後1か月をM、Fと過ごした後、3歳11か月まではMとGMと過ごしている。この3歳5か月以降の「子ども部屋時代」を本稿では「子ども部屋時代②」と呼ぶ。「子ども部屋時代②」では、BCを取り巻く言語環境が「子ども部屋時代①」と大きく変わる。まず、「子ども部屋時代①」ではBCが過ごす時間の大半で韓国語が使用されていたが、「子ども部屋時代②」では、反対にほとんどの時間を日本語のインプットを浴びて過ごすことになる。特に、Fが韓国に戻っていた約6か月間は、韓国語のインプットが一日数分のFとの映像通話におけるインプットのみとなる。この時期にBCは幼稚園に通い始め、M以外の大人の日本語のインプット、同年齢の児童の日本語のインプットを受けている。また、家庭ではMとGMと日本語で会話するため、一日を通して大量の日本語のインプットを浴びる生活となる。この時期には韓国語の発話はほとんど見られず、日本語の発話量が急激に増えた。

【「子ども部屋時代②」の言語使用例】

- ・ ママ、ラプンツェル見たい。：3歳6か月
- ・ 残念だった？残念じゃない、ここだけ入った。(ボールをスティックで打って穴に入れるゲームをしながら)：3歳7か月
- ・ 今すぐ行くから、そこに。どこに行くの？<GMが住んでいる場所>。今すぐ<GMが住んでいる場所>に行くから。：3歳10か月
- ・ ちょっと、やらないで、それ。おいて、おいて。おいてよ。(水をかける遊びをしながら、相手がタオルでガードしたところ、タオルのガードをしないでほしいという場面)：3歳10か月

「子ども部屋時代②」では、日本語のインプットの量が急激に増えるとともに、日本語の発話量も急激に増えた。それに伴い、話し言葉に多く現れる倒置や言いさし文も見られるようになった。この時期、BCがFとの映像通話を嫌がったことから、Fとの会話も一日数分と非常に短いものとなり、韓国語のインプットが激減した。また、韓国語でのインターアクションもなかったことから、韓国語による発話も同様に皆無となった。

「子ども部屋時代②」の発話では、表1の言語発達段階の特徴にあるように、ことばを使用して自己主張をすることができるようになってきている。ただし、

物事を順序だてて説明したり、詳しく説明したりすることは難しく、Mが幼稚園で何をしたかを尋ねると、この時期のBCは決まって「わからない」と答えていた。

続く「遊び友達時代（4歳～6歳）」であるが、ここでもBCの言語環境が大きく変化している。「子ども部屋時代②」では、6か月間にわたり家庭の内外ともに日本語のみのインプットを浴びて生活していたが、Fの再来日後、家庭内では韓国語、家庭の外では日本語のインプットを受ける生活となる。また、BCが幼稚園から帰宅後は、FがBCを養育していたため、韓国語がゼロの生活から、一日の半分は韓国語に触れる生活へと変化した。

この時期は、「子ども部屋時代②」に引き続き、日本語での発話が多いが、その発話は「子ども部屋時代②」に比べると文法的にも構造的にも複雑なものとなっている。また、Fの再来日後、1か月程度は韓国語のアウトプットがほとんど見られなかったが、徐々に単語レベル、文レベルの韓国語の発話が見られるようになった。

【「遊び友達時代（4歳～6歳）」】

・ パパ負けた。負けた人は叩くんだよ。そんなルールないよ。(中略) 見せて。あ、いいですね。맞나? 맞네. 맞네.(合ってる? 合ってるね。合ってるね。) (中略) たぬき、ちょっと見せますね。あ、いいですね、たぬきさんですね。(M、Fとかるたをしている際のMとBCの会話)：4歳1か月

・ ママ、今、サージリしてるの。アイロンかけてるんだね。うん。マッサージだからきれいにしてるんだ。きれいに、きれいに。あそこにいたこの子。あ、BCだった。毎日毎日…、よーし、できた。：4歳2か月

・ 쥐, 쥐! (ちょーだい、ちょーだい) (中略) BCちゃんが取った。아빠는 못잡았네. (パパは取れなかったね) 次行きますよ。다음 갑니다. 네. (はい) BC, 다리로 하지마라! (BC、足でしないで) BC는 다리로. (BCは足で) (M、Fとかるたをしている際のMとBCの会話)：4歳2か月

・ ママ、あの島に届くかな。島? あの島、あそこに東京パワーが沈んでるよ。あれ、東京パワーじゃないよ。：4歳10か月

・ 今度は何するんですか。今度は、まだ、ダイヤモンド失敗しましたから。こうですね。そうですね。こうやったりしたら危ないですから。(Mにあやとりを見せながら)：5歳2か月

・ 頑張れ。今、ママはお片付けしています。これ、パパにぐちゃぐちゃにされた。

パパにぐちゃぐちゃにされたやつです。こんな、ほら。ママ、これ。パパにぐちゃぐちゃにされた。ママ、どうにかアイロンでやって。アイロンでやって。：5歳9か月

・じゃ、BCから始めて。しりとり。リス。すいか。カラス。すなまば。すなはま？
まり。まりって？ボールのこと。ボールを日本語で言うと、、、ボールって、英語から来たことばでしょ。うん。それを昔からの日本語で言うと、まりって言うの。まりね。うん。りんご。ゴキブリ。きたねー。また「り」だよ。リンス。
すみれ。レモン。取り消しする？取り消して。「れ」だよ。レンズ。ず？レンズ！
ズ！ズ！：5歳10か月

Mの内省によると、Fの再来日後、しばらくの間、BCはMとFが韓国語で会話していると、泣きながら「韓国語で会話しないで」と言ったり、Fに韓国語で話しかけられたとき、Mに日本語でなんて言っているかと尋ねたりしていた。また、BCがFに何かを伝えたいとき、Mに通訳を頼むということもしばしばあった。

その後、韓国語への拒否感の表明と韓国語の発話の激減により、母語である韓国語の喪失を心配したMにより、家庭内ではできる限りMも韓国語を使用するようにしていた。Fとの韓国語でのインターアクションが増えるにつれ、4歳2か月の例のように日本語と韓国語を混ぜて使用するようになっていった。

日本語に関しては、表1の発達段階の特徴に見られるような、ことばの分析力を使用したしりとりなどの言葉遊びを行ったり、大人とのインターアクションを通して語彙を増やしていったりする様子が見られている（5歳10か月）。また、Mの内省によると、この時期に熊本方言や若者言葉、やや乱暴な言葉遣いを使用するようになり、日本語のバリエーションの使用も観察され始めている。これは、表1の特徴に見られる社会性の発達による周囲との交流、ことばの分析力を持つ時期という説明とも一致している。

4.2 母語の喪失

本節では、「子ども部屋時代②」「遊び友達時代」においてBCの韓国語の発話がなくなったこと、BCの韓国語に対する拒否感の表明等から、この時期に一時的に母語である韓国語を喪失していったと捉え、この時期のBCと保護者の葛藤について詳細に記述する。本稿では、BCの母語を日本語と韓国語とする。中島（2016）によると、母語の定義は多岐にわたり、特に多文化主義の国

においては自身の母語が何かを決定するのが非常に難しい。そこで、本稿では、母語を生まれて初めて覚えた言葉という意味で使用する。BCのように生まれてから複数の言語に日常的に接して言語を習得する同時発達バイリンガルの場合、母語が2つの言語で構成されていると捉えることができる。そのため、BCは言語発達の中段階ではあるが、現時点でのBCの母語は日本語と韓国語であると考ええる。

BCの言語発達を振り返ると、以下の表3のようになる。まず、「ゆりかご時代」は韓国に在住しており、BCの発話のほとんどが韓国語であった。日本語の発話は非常に限られていたが、Mからの日本語のインプットは理解していた。続く「子ども部屋時代①」も韓国在住で、この時期から日本語・韓国語の発話が見られ始める。日本語と韓国語の使用を比べると、韓国語は発話量が多く、二語文が現れ始める時期も早かった。この時期においては、韓国語の発達がより進んでいると考えられる。居住地を韓国から日本に移した「子ども部屋時代②」であるが、この時代は周囲からの韓国語のインプット、韓国語でのインターアクションがほぼ皆無となり、BCの使用言語も日本語のみとなる。Fからの韓国語のインプットを受け、Fとの韓国語でのインターアクションが再開する「遊び友達時代」では、「子ども部屋時代②」で激減した韓国語の発話が徐々に増えていくが、使用する文法の難易度や文構造の複雑さは日本語の方が高い。

表3 BCの言語発達段階別の使用言語

言語発達段階	生活場所	使用言語
ゆりかご時代	韓国	韓国語（日本語はインプットの理解が中心）
子ども部屋時代①	韓国	日本語・韓国語（日本語<韓国語）
子ども部屋時代②	日本	日本語
遊び友達時代	日本	日本語・韓国語（日本語>韓国語）

本稿では「子ども部屋時代②」にFとのインターアクションが無くなった約6か月間でBCは一時的に母語である韓国語を喪失していったと考えるが、その期間および母語の喪失後にBCに見られた変化についてMの内省をもとに記述したい。なお、以降の記述は、一名の内省による記述であり、母語の喪失との関係については明らかにされていない。

「子ども部屋時代②」に見られたBCの変化には、①韓国語への拒否感の表明、

②アイデンティティの揺らぎ、③精神的な不安定さの3点が挙げられる。まず、「韓国語への拒否感の表明」であるが、これはFが不在の6か月間とその後の数か月にわたって見られた。具体的には、以下のような言動が挙げられる。

- ・韓国語がわからないからという理由により、Fとの映像通話を拒否する
- ・Fの再来日後、MとFが韓国語で話していると、自分は韓国語がわからないから会話をしないようにと泣いて訴える
- ・Mに家の外で韓国語を話さないようにと要求する

次に、「アイデンティティの揺らぎ」であるが、ここではアイデンティティを自分はどの文化に属するのか、どの言語を使用するグループに属するのかという、文化・言語的なアイデンティティの意味で用いる。Mの内省によると、BCは「子ども部屋時代②」において、自分とMは日本人でFは韓国人であるという発言を多く行っている。上記の韓国語の会話をやめるようM・Fに求める場面においても、BCは日本人だから韓国語はわからないという趣旨の発言をしている。その後、「遊び友達時代」においては、BCが通う幼稚園の教員や友人に対して、自分は韓国人だという発言をしており、BCのアイデンティティに対する意識に変化が見られた。BCは現在、6歳6か月であり、表1の「学校友達時代前半」にあるが、自身のアイデンティティに関して、「Mは日本人、FとBCは韓国人、でも、BCは日本語も話せるから日本人って感じもする」(2023年5月7日)と発言している。このように、「子ども部屋時代②」から「学校友達時代前半」にかけて、アイデンティティへの意識に変化が見られた。

最後に、精神的な不安定さについてだが、「子ども部屋時代②」からBCに場面緘黙の特性が見られ始めた。これは、「ゆりかご時代」「子ども部屋時代①」には見られなかったもので、具体的な変化としては、顔見知りの近所の人に挨拶ができなくなる、人前で発言することを極端に嫌がる、人前に出ると固まり一切発言をしなくなるといったことが挙げられる。この特性は、「子ども部屋時代②」の終わりごろに始まり、「遊び友達時代」の中頃(5歳頃)に最も強く現れ、その後この傾向は弱まってきている。

以上、本節ではコロナ禍における渡航制限によりFとの韓国語でのインターアクションが6か月間途絶えたことによるBCの一時的な母語の喪失について、それがもたらしたBCの変化とあわせて記述した。今後のBCの言語使用やアイデンティティへの意識については、引き続き観察を続けていきたい。

5. おわりに

本稿では、多様なコロナ禍の人々への影響のうち、特に言語に関する一側面について記述すること、より複雑な言語発達を経るバイリンガル児の母語の喪失の一例について記録することを目的として、日韓バイリンガル児の言語発達初期段階（「ゆりかご時代」「子ども部屋時代」「遊び友達時代」）の各段階における言語発達を実際の発話例とともに記述した。また、母語の喪失については、母語を喪失した期間とその後の日韓バイリンガル児の変化について、①韓国語への拒否感の表明、②アイデンティティの揺らぎ、③精神的な不安定さの3点について述べた。本稿の記述は、主にMの内省や発話の一部をデータとしたものによるため、BCの言語発達の様相を正確に記述したものではない。しかしながら、本稿における記録は、今後、日本国内に増えていくだろう外国にルーツを持つ子どもの言語発達を考える上での一資料になるかと考える。

参考文献

- 土屋賢治 (2021) 「発達早期のライフステージイベントとしての母親の産後抑うつと、その影響を受けた児のコミュニケーション機能の発達」『日本生物学的精神医学会誌』32巻3号、135-140.
- 中島和子 (2016) 『完全改訂版バイリンガル教育の方法』アルク
- パッツィ・M. ライトバウン／ニーナ・スパダ (2014) 『言語はどのようにして学ばれるか』岩波書店
- Cummins, J. 1979. Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research*, 49, 222-251.
- Sachs, J., Bard, B. and Johnson, M. L. 1981. "Language learning with restricted input: Case studies of two hearing children of deaf parents", *Applied Psycholinguistics*, Volume 2, Issue 1, pp. 33-54.